

甦る人生 感謝と思いやり



とよだ みのる
豊田 稔

きたいばらき
北茨城市長(茨城県)

わがまちの魅力

北茨城市は茨城県の最北端、福島県との県境にあつて、東に太平洋、西に阿武隈高地を擁する海と山の美しい土地です。新鮮な魚介類や温泉・鉱泉などの天然・自然資源にも恵まれ、市の魚「アンコウ」が旬を迎える秋から冬にかけては、本場の「どぶ汁」を堪能するため多くの観光客でにぎわいます。近代日本美術の発展に大きな功績を残した思想家の岡倉天心は、「東洋のバルビゾン」と称してこの地に「日本美術院」を置き、画家の横山大観、菱田春草などが新しい美術を創造し、この地からいくつもの大作を世界へと発信しました。また「シャボン玉」や「赤い靴」などで知られる本市出身で童謡詩人の野口雨情をはじめ多くの文化人が、創作活動の拠点として選んだ芸術と文化の薫り高い土地でもあります。



山紫水明の別天地(花園)

何のために「市長になりたか」のか

世の中の不条理を市民と共に解決したい。そう思い至ったのが36歳の時。そのころ、私は生まれ育った北茨城市で自動車学校を経営していました。まず、わがまちで世の不条理を正そうと市議に立候補したのが、政治の世界への入り口でした。

昭和56年に市議選で初当選。平成2年には、2度目の挑戦で市長に選ばれました。目指したのは、父の夢を引き継ぐこと、「弱い立場の人に光を当てる」こと。のんびりしている余裕はありませんでした。

私の父は、市長を3期務め、その在任中に急逝しています。常磐炭田の中核として活況を呈した石炭産業の斜陽化に呼応して工業団地を造成するなど、まちの在り方を根本から考え、変えなければならぬ最中であり、さぞや無念だったでしょう。見届けられなかったこと、やり残したことがあったと思います。その無念を引き継ぎたい、その思いが私の中に強く芽生えていたのです。そして何よ



景観と芸術(五浦/いづら)

り、このまちを発展させたかった。自分以外に、それができる者はいない、という確信がありました。

逮捕、実刑判決を乗り越えて

高校時代からの憧れでもあった政治の世界に入り、そして行政の長として、全ては市民のため、まちの発展のために精いっぱい努めていました。

しかし、人生、往々にして禍福はあざなえる縄のごとし。平成6年11月、市長に再選し、2期目でいよいよさまざまな施策を実現しようというとき、事件が起こりました。平成7年3月、収賄容疑で逮捕されたのです。裁判では「事実無根」と一貫して無罪を主張し続け、最高裁まで闘いました。しかし、真実は究明されず、共謀共同正犯が成立するとして「懲役2年6月、追徴金7500万円の実刑判決」が確定し、私は



岡倉天心ゆかりの大学、東京藝術大学「藝祭」にて(中央が筆者)

結果、私は市長に返り咲くことができませんでした。信じて支援してくれた市民に感謝の気持ちでいっぱいでした。そして、支持してくれた市民だけでなく、反豊田総だった市民も含め、全ての市民のために、この命を使い切ろうと改めて誓ったのでした。

刑に服しました。

逮捕から市長に返り咲くまでの12年間は絶望の淵に突き落とされました。しかし、私には生きる力がありました。家族を始め支援者への感謝の念と、「必ず甦よみがえってみせる、負けてたまるか」という怒りの感情が消えることはなかったのです。刑事施設で夢想したのは「囲炉裏端で夢追い人たちと焼酎を片手に語り合う」情景です。

平成19年1月、公民権を回復した私は、6月の市長選挙に出馬し、事件の審判を北茨城市民に委ねたのです。「けしからん、そうお思いの方は私を落としてください。事実無根を信じていただけけるならご支持を賜りたい」と。

私をつくったもの

いくら自分が「理想」だと信じていることでも、他の人の意見に耳を傾けられなければ、自分への利益誘導になってしまうことは認識しています。ゆえに、私の座右の銘は「感謝と思いやり」です。政治家だけではなく、どんな仕事をするにしても他の人の意見に耳を傾ける感謝と思いやりを持つことが大切なのは言うまでもありません。自分の味方だけでなく、敵対した人にも同じように思いやりを持つこと、これは政治家に必須の心得だと肝に銘じています。

この考え方は、市長だった父の影響はもちろんですが、母からの影響が強いのだと思います。母は誰にでも分け隔てなく接する慈愛深い性格で、皆一様に「おかみさん」と呼び慕われておりました。もしかすると母は、真の政治を体現していたのかもしれない。母の姿は、私の人生に大きな影響を及ぼしています。

返り咲きから15年。現在、6期目を務めています。長期にわたる市政に慢心はないか、目は曇っていないか、常に自問しています。収賄の罪に問われ、実刑判決を受けて刑に服した2年6月。いわれなき罪に苦しんだ時間は、決して「よかった」とは言えません。自分自身にとっては苦しくつらい時期を自己教育の日々に置き換え、誰にも負けぬ精神力を養うこととなったのです。

「生きる」と「そのものに情熱を

まちも人も、年を重ねるにしたがって若き日の夢や情熱を失ってしまいがちですが、無実の罪で刑事施設に収容され、絶望の12年を過ごした私にとって、生きていることは夢のように素晴らしい。いつまでも「生かされた責任」を全うしなければならぬと思ふのです。

私に課せられた使命は、先人から受け継いだこのまちの豊かな財産を守り、未来につなげることに、誰もが「ずっと住み続けたい」と思える魅力あるまちをつくることです。

豊かな自然の中で心穏やかに過ごせるまち、誰もが希望を持って生きられるまち、北茨城市には、それができる素地があります。地方自治に求められているのは、きめ細やかな政策と実行力のある政治です。日本中の市町村が誇りを持って「わがまち」を良くしていく。私だって負けません。がんばります。皆さんがんばりましょう。



市長と語る会の様子(筆者)